福岡市埋蔵文化財調査報告書　第805集

博多 96

―博多遺跡群132次調査報告―

2004

福岡市教育委員会

正誤表　（福岡市埋蔵文化財調査報告書第805集『博多96』 2004）

頁	行	誤	正
3	9	盛土層状に立地して	盛土層上に立地して
6	図11	〔右上端遺物〕遺物番号欠	807
6	17	〔文末に追加〕	807は瓦質土器湯釜である。
14	2	皿(大-皿Ⅱ2類)	皿(大-皿Ⅲ類)
16	28	79は土師器と	779は土師器と
18	1	把手部を裁量したもの。	把手部を再利用したもの。
抄録	遺跡名	博多遺跡群 第2次	博多遺跡群 第132次

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第805集

博多 96

—博多遺跡群132次調査報告—

2004

福岡市教育委員会

序

福岡市内では約1,000箇所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が登録されており、いまなお新たな発見も続いています。そのひとつが博多遺跡群です。博多遺跡群の立地する旧博多部は、建物建設等の工事が活発に進められて日々変貌を遂げつつあります。

福岡市教育委員会では、現状のままで保存できない遺跡について、原因となる工事等に先立ち、記録による保存のための発掘調査を実施しています。今回の調査もそのひとつであり、本書により、その成果を公刊することとなりました。

なお、発掘調査から報告書作成に至るまでには、山下矩生氏をはじめとする関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

本書が、博多遺跡群についての理解を深めるための資料として活用されるところがあれば幸いです。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　生田 征生

はじめに

1　本書は、2001 年度（平成 13 年度）、福岡市博多区上呉服町 480・481・482 地内において、福岡市教育委員会がおこなった、博多遺跡群第 132 次発掘調査の報告である。

2　発掘調査は、文化財保護法 57 条の 2 に基づく届出を受け、山下矩生氏から福岡市教育委員会が業務委託を受け、併せて国庫補助を受けて文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査にあたって、山下矩生氏を始めとした関係各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げる。

3　発掘調査・整理・本書編集は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課 杉山富雄が担当した。表土鋤取りから遺構検出については田中寿夫・大庭康時の協力を得た。

4　出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡　例

1　位置の記録には、『博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿（1992 日本測地系）』の成果を利用した。

2　報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記し、これを登録番号とする。

3　図中に用いる方位は、国土座標の座標北であり、真北から 0 度 19 分西偏している。

4　遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺 3 分の 1 で図示している。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。

5　本文・表中、陶磁器の分類表記は下記によった。
　横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』〔D で表記〕

調査番号	0120	遺跡略号	HKT－132
調査地番	福岡市博多区上呉服町 480・481・482	分布地図番号	48（千代博多）
工事面積	324㎡	調査対象面積	225㎡
調査実施面積	84㎡	調査期間	2001 年 7 月 23 日～2001 年 9 月 10 日

本文目次

Ⅰ　博多遺跡群第 132 次調査の経過と概要
　1　調査に至る経過…… 1
　　埋蔵文化財事前審査
　　発掘調査
　2　発掘調査地点の立地…… 1
　3　発掘調査と調査成果の概要…… 3
　　発掘調査の経過
　　土層
　　出土遺構
　　出土遺物
Ⅱ　博多遺跡群第 132 次調査出土の遺構と遺物
　　土壙 5（図 10）…… 6
　　土壙 18（図 12・13）…… 6
　　土壙 23（図 14・15）…… 7
　　遺構 33（図 18）…… 8
　　土壙 39 …… 10
　　土壙 41（図 21・22）…… 10
　　土壙 45（図 24）…… 11
　　遺構 50（図 26・29）…… 13
　　土壙 55 …… 14
　　井戸 63（図 32・33）…… 14
　　土壙 73（図 32・33）…… 16
　　土壙 76（図 32・33）…… 16
　　1 面出土遺物（図 37・38）…… 17
　　2 層出土遺物（図 37・38）…… 18
　　銅銭（図 40）…… 18
Ⅲ　おわりに…… 21

挿図目次

図 1　博多遺跡群の位置（1:50,000）…… 1
図 2　第 132 次調査地点の位置（1:5,000）… 1
図 3　1 区の遺構（西から）…… 2
図 4　2 区の遺構（西から）…… 2
図 5　土層図（1/60）…… 3
図 6　調査区（1/100）…… 4
図 7　北端土層（南から）…… 5
図 8　中央部土層（南から）…… 5
図 9　東辺土層（西から）…… 5
図 10　土壙 5（1/40）…… 6
図 11　土壙 5 出土遺物（1/3）…… 6
図 12　土壙 18（1/40）…… 7
図 13　土壙 18（西から）…… 7
図 14　土壙 23（1/40）…… 7
図 15　土壙 23（西から）…… 7
図 16　土壙 18･23 出土遺物（1/3）…… 8
図 17　遺構 33 出土遺物（1/3）…… 8
図 18　遺構 33（1/3）…… 9
図 19　遺構 33 出土遺物（1/3）…… 9
図 20　遺構 39 出土遺物（1/3）…… 10
図 21　土壙（北から）…… 10
図 22　土壙 41（1/40）…… 11
図 23　土壙 41 出土遺物（1/3）…… 11
図 24　土壙 41 出土遺物（1/3）…… 11
図 25　土壙 45 出土遺物（1/3）…… 11
図 26　井戸 48（1/40）…… 12
図 27　井戸 48（西から）…… 12
図 28　井戸 48（1/3）…… 13
図 29　遺構 50（西から）…… 14
図 30　遺構 50（1/40）…… 14
図 31　土壙 55 出土遺物（1/3）…… 15
図 32　井戸 63･遺構 73･井戸 76（東から）… 15
図 33　井戸 63･遺構 73･井戸 76（1/3）…… 16
図 34　井戸 63 出土遺物（1/3）…… 16
図 35　遺構 73 出土遺物（1/3）…… 17
図 36　井戸 76 出土遺物（1/3）…… 18
図 37　1 面出土遺物（1/3）…… 19
図 38　2 層出土遺物（1/3）…… 20
図 39　2 層出土遺物（1/3）…… 21
図 40　銅銭（2/3）…… 21

表目次

表 1　報告遺物一覧 1 …… 22
表 2　報告遺物一覧 2 …… 22

Ⅰ 博多遺跡群第132次調査の経過と概要

1 調査に至る経過

埋蔵文化財事前審査

2001年（平成13年）4月2日付けで博多区上呉服町480・481・482地内における事務所兼住宅建築について、山下矩生氏から福岡市教育委員会に埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。埋蔵文化財課では4月12日、計画地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財を確認した。当該計画の内容について現状での保存措置の検討を行なった。しかし、計画内容から工事の埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断し、やむなく記録保存の措置をとることとした。

発掘調査

記録保存のための発掘調査は、山下矩生氏からの委託を受け、国庫補助を併せて福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では文化財部埋蔵文化財課を担当とし、2001年7月23日から博多遺跡群第132次調査として現場作業に着手した。

発掘調査は、事業者からの現物提供による表土鋤取り、搬出まって7月26日人力による掘り下げに着手した。調査による廃土は場内処理としたことから調査区を2分割し、土砂を反転しながら進め、後半の2区の調査を完了したのは9月10日である。

調査は、明かり掘削により行ない、安全のための引きをとるなどしたことから、調査面積は84㎡となった。

2 発掘調査地点の立地

博多遺跡群第132次調査地点の立地

本地点は、現況の微地形でいう微高地Ⅱ[(1)]の端部で調査区前の道路（西門通り）がかつて「富士見坂」と呼ばれいたほどの明確な傾斜をもっている。本地点も現況で1.5mの段差がある宅地となっていた。

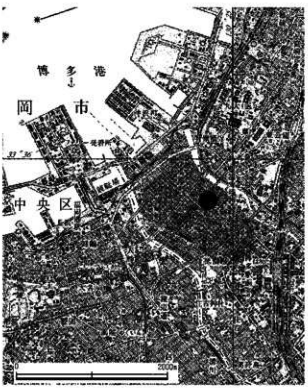


図1 博多遺跡群の位置（1:50,000）

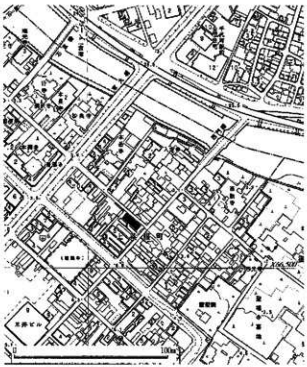


図2 第132次調査地点の位置（1:5,000）

図3　1区の遺構（西から）

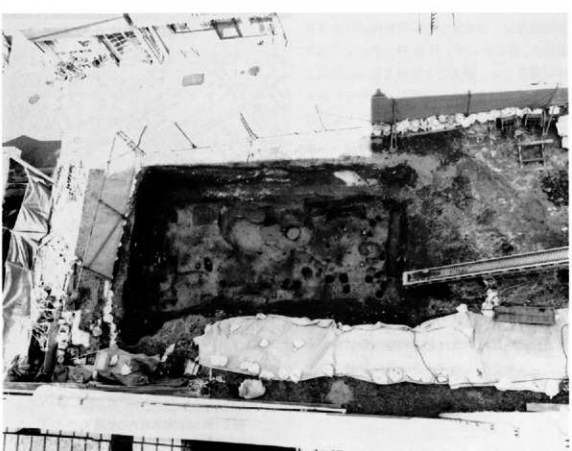


図4　2区の遺構（西から）

3　発掘調査と調査成果の概要

発掘調査の経過

調査地は北西～南東に軸をもつ幅10m余、長さ35m余の細長い平面形である。傾斜地に立地することから、東西で1.7mの段差がある短冊形の土地に分かれていた。南東側の辺から半ばまでを1区、残りを2区とし、上砂を反転して調査を行った。

試掘結果を受けて、黒褐色粘質土層（標高2.2～2.3m）から着手した。次いで下位の砂層（黄褐色・暗褐色、標高2.7m）上面で調査を進めたが、上位の遺構以外に明確な遺構がなく、縞状に土層が分布するのみであった。そこで、トレンチにより断面観察を行った。その結果、砂層は全て客土であり、本地点の全体が盛土層状に立地しており、地山とすべき粗砂層は標高1mの位置にあることがわかった。結果として本地点では1面での調査となった。

土層　調査区北端、中央部の土層を基に考えると、中世の遺構確認面は標高2.5m前後の位置に残り、下位の盛土層の黄褐色ないし暗褐色の砂層上面が、調査区南東端で標高2.6m、北西端で2.0mの高さにある。この砂層を覆って整地したように黒褐色粘質土が広がり、上部が遺構検出面となる。

盛土層とするのは、上記の砂層、それに挟まれる黒褐色粘質土層、灰層からなっており、図示する南西～北東方向に大きく傾斜してレンズ状に堆積している。基盤砂層に直接載る部分は細かな縞状をなして流水が影響していることがわかる部分がある。一方、これと直交する北西～南東断面では層の傾斜はほぼ水平と見え（図9）、盛土が南西から北東方向に進行したことが窺われる。

出土遺構　台帳に登録した遺構は攪乱及び近代遺構のものを除いて、101基である。いずれも黒褐色粘質土層で検出したものである。内訳は井戸4基、土壙21基、その他小穴、不整な落ち込みなどである。小穴には柱穴も含まれていると思われるが、根石、柱痕跡などを残し、明確にそれとわかる遺構はごく少ない。

出土遺物　総量でコンテナ39箱ほどの分量出土した。糸切底土師器付皿と龍泉窯系青磁、口禿の皿が顕著な白磁、比較的大形の破片がある陶器、各種の鉢類が主要な遺物である。半ば以上は、黒褐色粘質土層、盛土層からの出土である。特に盛土層からは、陶磁器の遺存状態の良好な資料が出土している。

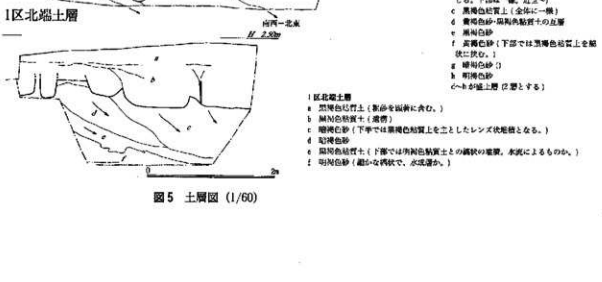


図5　土層図（1/60）

(1) 磯望・下山正一ほか1998「第4章 博多遺跡群をめぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』pp. 69-112

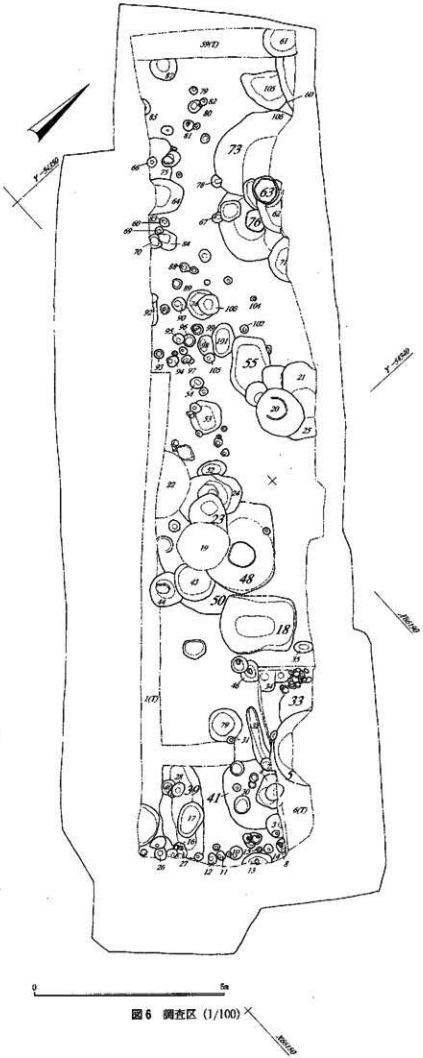


図6　調査区（1/100）

図7　北端土層（南から）

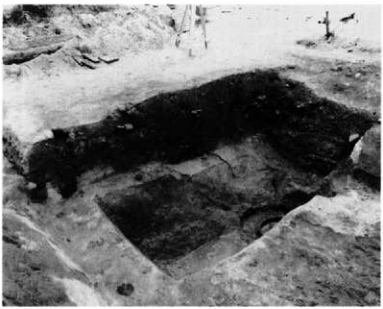


図8　中央部土層（南から）

図9　東辺土層（西から）

II 博多遺跡群第132次調査出土の遺構と遺物

前述したように今回調査では、遺構面としては1面でであったこと、遺構の数が限定されることから、登録番号の順に報告する。

土壙5（図10）

1区東壁際で検出した。先行トレンチにもかかるため、形状を一部復原して図示する。上部は攪乱により破壊されている。調査区には半分以下の部分がかかる。それからの形状は、平面で楕円形、断面は逆台形状を呈す。覆土は粗砂混りの黒褐色土、現状での長さ2.0m、幅0.9m以上、調査面からの深さ0.9mを測る。壁面からは確認できなかったが、かなり浅い位置に掘り込み面を持つものと思われる。

出土遺物（図11、表1）　細片から小破片までの土器がほとんどである。

801は土師器皿で口縁部に煤状の付着物があり、灯明皿として使用されたものであろう。802は口禿の白磁皿、804、803も白磁である。808は青白磁、805は青磁蓮弁文碗である。806は粉青沙器で碗と思われる。

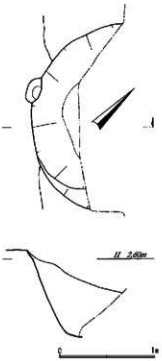


図10　土壙5（1/40）

土壙18（図12・13）

1区で検出した。不整な隅円長方形で、調査面では皿状の浅い遺構である。長さ2.0m、幅1.5m、深さは調査面から0.1mを測る。底面近くに完形、大破片の土師器坏皿が出土した。底面の2/3ほどの部分散布したような出土状態である。外に砂が銹着して形状を判別できないが刀子状の鉄器も同じ深さから出土している。

出土遺物（図16、表1）　出土量はコンテナ2/3ほどの分量で、上述したような出土状況を反映して、大半が土師器坏皿である。完形、大破片資料を多数含む。土師器坏皿は、底部が糸切底で板目

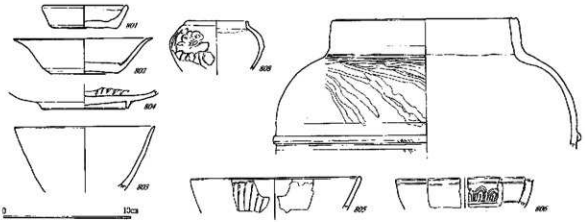


図11　土壙5出土遺物（1/3）

が残る。703・88・84・704・95・62・46・706・85・90・94・705・104・105は皿、87・107・707・91・701・98・99・97・83・101は坏である。坏皿のうち、1/2以上残る皿14点、坏10点を計測した。皿の口径は85～79㎜の幅があり、平均82㎜、底径は65～51㎜の幅で平均60㎜、器高は16～11㎜の幅で平均13㎜となる。同様にして、坏では口径が136～122㎜の幅で平均127㎜、底径90～75㎜の幅で平均81㎜、器高が30～24㎜の幅で平均27㎜となる。

土師器の外は少量の陶磁器、土器が出土した。口禿の白磁皿、須恵器捏鉢などの細片が含まれている。

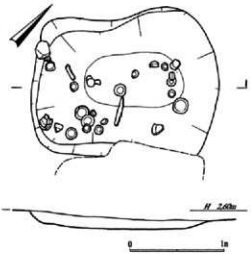


図12 土壙18 (1/40)

土壙23 (図14・15)

1区で検出した。不整な隅円方形で、断面は不整な逆台形状となる。径は1.0m、調査面からの深さ0.6mを測る。覆土は黒褐色の粘質土で、粘土粒を顕著に含み全体に一様である。底面から土師器坏、皿がおかれたような状態で出土した。

出土遺物 (図16、表1)

上記土器の外は、極小量の土器破片が出土した。龍泉窯系青磁、内底面に型押しの文様をもつ白磁皿などが出土した。土壙底面から出土した土師器皿76は口径78㎜、底径56㎜、器高13㎜を測る。坏75は口径120㎜、底径67㎜、器高26㎜を測る。いずれも糸切底で、外底面板目が残る。722も土師器坏である。

図13 土壙18 (西から)

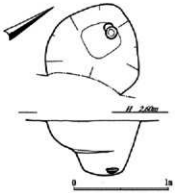
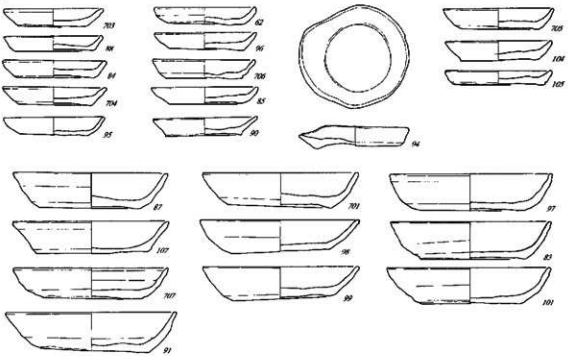


図14 土壙23 (1/40)

図15 土壙23 (西から)

土壙18



土壙23

図16　土壙18・23出土遺物（1/3）

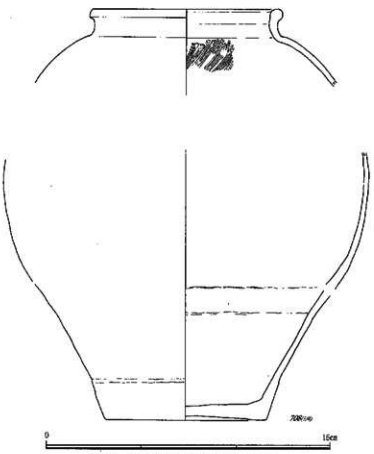


図17　遺構33出土遺物（1/3・1/4）

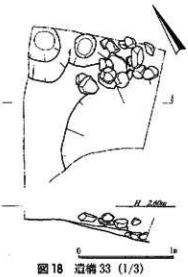


図18　遺構33（1/3）

遺構33（図18）

1区東壁の際で検出した。不整な形状の落ち込みが調査区外に向かう。先述したように地山とする層がすべて盛土層であることからそれの一部であった可能性は捨てきれないが、礫が密集して、掘形のような傾斜面を認めたことで遺構として報告する。覆土は黒褐色、粗砂混りの粘質土で全体に一様である。平面の規模は全く不明、深さは調査面から0.3m以上となる。

出土遺物（図19、表1）　覆土中からコンテナ1箱ほどの分量出土した。とくに疎密はなかった。陶磁器の割合が顕著で、なかでも龍泉窯系青磁碗には、大形の破片資料が多い。いずれも外面に鎬蓮弁文を彫る。釉は透明ないしやや半透明。ガラス光沢を呈す。玉縁の碗があるが、口禿の皿も含まれる。さらに図示するように中・

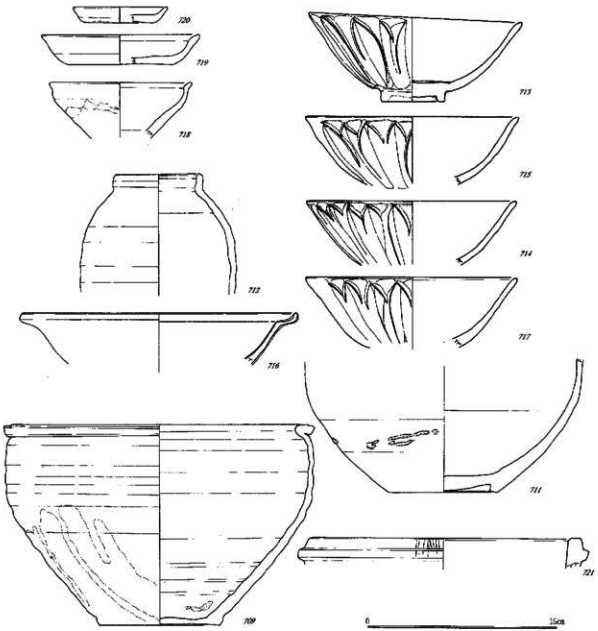


図19　遺構33出土遺物（1/3）

大形の陶器が顕著である。なかでも褐釉陶器の資料が顕著で壺、鉢がある。

720は土師器皿、719は坏である。718は天目釉碗である。713・715・714・717は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。716は同坏である。712は陶器短頸壺である。709・711は陶器鉢である。721は石鍋口縁部である。716は大形の陶器短頸壺。口頸部、胴部、底部は相互に接合しないが、胎土、釉などから同一個体と判断した。倒立させて施釉したものか釉の流れが逆である。

土壙39

1区で検出した。長楕円形で断面が浅い皿状の土壙としたが、これも盛土の一部である可能性が残る。覆土とするのは黒褐色で粘土混りの砂である。

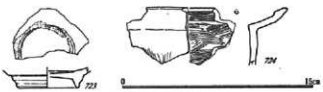


図20 遺構39出土遺物（1/3）

出土遺物（図20、表1）　覆土中から少量出土した。土器はいずれも細片資料である。小形磁器には口禿の白磁碗が含まれる。図示する723は青磁碗で、高台全周にわたり目痕が残る。土師器の鍋と思われる724は薄手で、口縁部が大きく外方に屈曲し内面には口縁に沿う方向に細かな刷毛目調整が行なわれる。胎土が緻密で灰白色を呈す。「京都型瓦質鍋」に形状がよく似る。容器以外に平瓦の細片、土人形、鉄製品には釘がある。

土壙41（図21・22）

1区で検出した。平面では不整な円形、断面が漏斗状を呈する土壙である。井戸である可能性も考えたが、井戸側などの検出はなかった。ただ、調査面では土壙41の中心部にあたる位置で土壙状の落ち込みを認めた。この部分は黒褐色砂と黄褐色砂との互層をなしており上部には灰層を挟んでいた。この部分が円筒状の空間を埋めた覆土とすれば、井戸とも考えられる。ただしそれより下位には何らかの痕跡を認めることはできなかった。以下の覆土は上半部が塊状の黒褐色の粘質土、下半部は暗褐色砂層である。

上部の広がる部分で長さ1.8m、幅1.5m、調査面からの深さ

図21 土壙（北から）

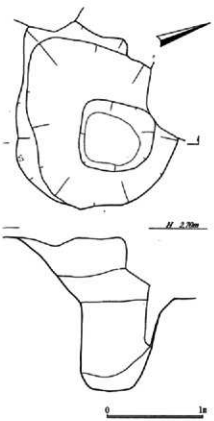


図22 土壙41（1/40）

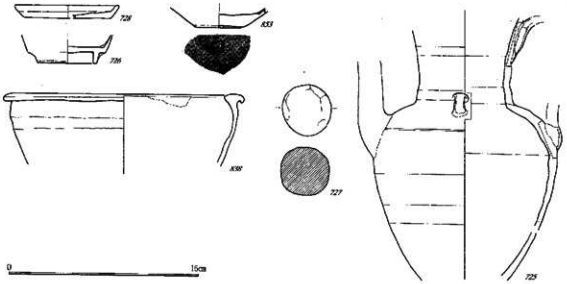


図23　土壙41出土遺物（1/3）

は1.5mを測る。

出土遺物（図23、表1）　コンテナ1/5ほどの分量が覆土中から散漫に出土した。総量の半ば以上が陶器類、残りを土師器坏皿、磁器類が占める。平瓦、丸瓦の細片が出土している。また、鉄釘が複数ある。極小量ながら獣骨も認められる。

728は土師器皿である。726は青磁坏、853は白磁皿底部である。外底面に墨書が残る。838は陶器鉢である。725は白磁水注である。727は石製球で、丁寧に擦り磨いて整形している。

土壙45（図24）

1区土壙18下位の遺構である。2層を掘り下げる過程で検出したもので、形状などは不明瞭である。隅円の方形ないしは長方形と見える。調査区東壁での観察からすると遺存面はかなり高い位置にあるが、上部では覆土と盛土層（2層）との区分が難しく、実際の検出位置まで確認できなかった。黒褐色で粘土混りの砂を覆土とする。

出土遺物（図25、表1）　遺物は覆土中から散漫に少量出土した。大形の破片を含む資料である。陶磁器が3/5ほどの分量あり、残りが土師器坏皿その他である。磁器には龍泉窯系青磁蓮弁文碗、内底面を輪状に掻き取る白磁碗があるが、最も多く遺存状態が良好な資料は口禿白磁碗である。

731・732は土師器皿、733は土師器坏である。土師器皿は外底面に板目が見られないが、坏には残る。皿の口径は実測できた資料で82mm、坏は復原値で128mmとなる。734・735は口禿の白磁皿である。736は陶器短頸壺である。

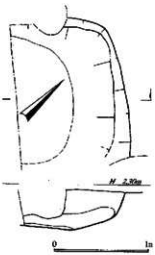


図24　土壙41出土遺物(1/3)

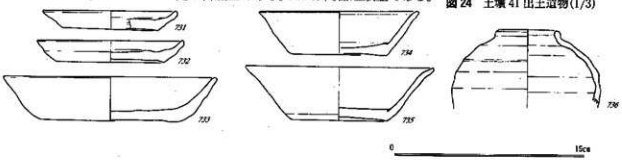


図25　土壙45出土遺物（1/3）

井戸 48（図 26・27）

1 区中央部で検出した。土壙 23、土壙 50 と重複してそのいずれよりも新しい。井戸 48 に重複して新しい遺構 19 は、最近まで使用された瓦組みの井戸である。掘形はすり鉢状に大きく掘るが、本例は平面では楕円形を呈する。下半部で井戸側を検出した。木製桶形で、最下段のみを確認できた。部材は腐朽して痕跡程度に残る。掘形の埋土は、壁面に沿って滑り落ちたような堆積である。暗褐色砂層の中に地山砂の黄褐色砂、当時の表土層と思われる黒褐色砂層がレンズ状に挟まれる。井戸側内の覆土は黒褐色粘土層で軟質、灰が多量に混じっていると観察される。現状で、井戸側下端が湧水面となっており、この位置で標高 0.6m を測る。掘形の長さ 3.2m、幅 2.5m、調査面から井戸側下端部までの深さ 1.5m を測る。

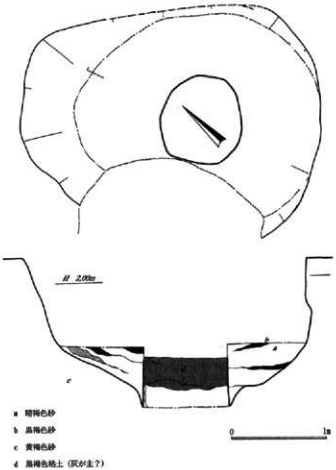


図 26　井戸 48（1/40）

出土遺物（図 28、表 1）　総量でコンテナ 2/3 ほどの分量が出土した。土器は小破片までの資料で、土師器坏皿は比較的少量である。外底面はすべて糸切底で、板目はあるものとないものと混じる。小形磁器のうち、白磁は口禿の皿、碗以外は極小量である。中大形等陶器は量として多いがいずれも細片資料である。738・737 は土師器皿、739 は土師器坏である。741・824 は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬運弁文が施される。742 は龍泉窯系青磁坏で内面に型押しの運弁文が施される。740 は鉄釉陶器皿である。845・847 は土師器鍋である。

以上の外、東播系須恵器捏鉢細片がある。平瓦細片は須恵器質で

図 27　井戸 48（西から）

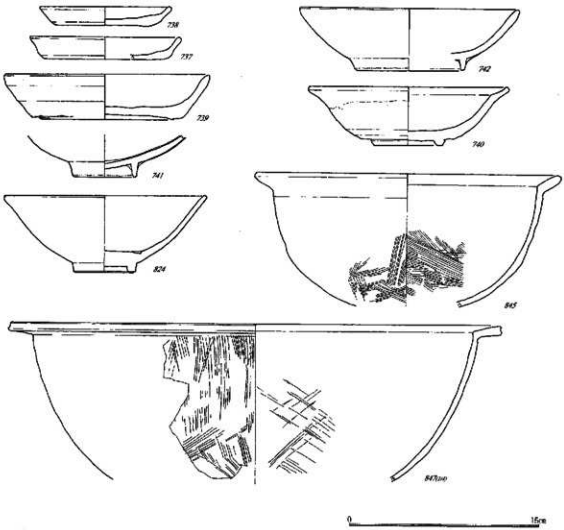


図28　井戸48（1/3・1/4）

薄く、胎土は精良で堅緻、上下面に縄目叩きを残す。

金属製品には銅銭、鉄釘がある。銅銭は3点出土し、うち2点は「政和通寶」、「天聖元寶」である。釘とするものには両端が尖って着柄を考えられる資料があり、利器の可能性がある。

遺構50（図26・29）

井戸48のほか、土壙43、44と重複してそのいずれよりも古い。重複によりごく一部が遺存する。形状規模からして井戸掘形と考えるが、井戸側は遺存しない。2段掘りになっており、覆土は暗褐色砂、現状で長さ2.5m、幅1.7m以上、調査面からの深さ1.1mを測る。底面の標高は1.2mである。

出土遺物（図30、表1）　覆土中から散漫に少量出土した。上層は細片から小破片の資料である。青磁、白磁、鍋類、瓦、鉄製品がある。

上師器坏皿は少量である。

青磁碗744・743は中国製とは見えない資料である。744は胎土が細流砂を顕著に含み、灰色を呈す。ガラス状光沢をもつ釉がむらにかかり、高台内面まで及ぶ。畳付は施釉後削り取るが、雑である。743は胎土に粒状性がある。釉にむらがあり発泡して不透明である。745は龍泉窯系青磁坏である。

白磁は口禿の皿のほかに内底面を輪状に掻き取る皿（大－皿Ⅱ2類）がある。

鍋（748）は土師質で、口縁部をお大きく外反させる。浅い器形で、内外面を撫で調整している。

瓦は比較的多量に出土した。丸瓦は瓦質で厚い。下面に布目上面には縄目の叩き痕を残す。平瓦は瓦質で、厚さに変移がある。下面に縄目叩き痕を残すものと残さないものとがある。瓦質で厚さ40mmほどの資料がある。磚か。

鉄製品では釘が1点出土した。

図29　遺構50（西から）

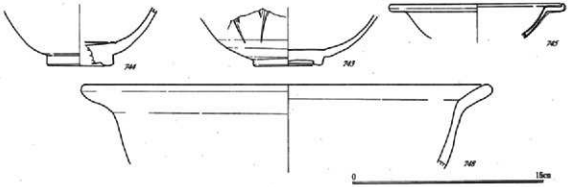


図30　遺構50（1/40）

土壙55

1区と2区とにかかる遺構である。形状が不明確であるが、隅円の長方形と考えられる。覆土は黒褐色の粘土混りの砂である。長さ1.7m、幅1.0m、調査面からの深さ0.2mを測る。

出土遺物（図31、表1・2）　遺物は少量が覆土中から散漫に出土した。土器は小破片までの資料である。土師器坏皿は糸切底で底面に板目を残す。

小形磁器は龍泉窯系の蓮弁文碗、白磁皿がある。750は口禿の白磁皿である。752は龍泉窯系青磁坏、751は鎬蓮弁文碗であるが、胎土に粒状性があり、褐灰色を呈す。釉は薄く、発泡し半透明、鈍いガラス状光沢を呈す。施釉部は明緑灰色である。

陶器では長胴壺がある。国産の土器類では東播系須恵器捏鉢のほかに土師質鍋753がある。小形で、口縁部で大きく屈曲外反する。体部の内外面には刷毛目調整を施す。

井戸63（図32・33）

2区で検出した。遺構73、井戸76と重複する。井戸76より新しいが、遺構73との関係は不明確である。一部が調査区壁にかかる。

井戸側は底部を除き腐朽してないが、空隙が完全に埋没することなく上部が塞がったかたちで遺存

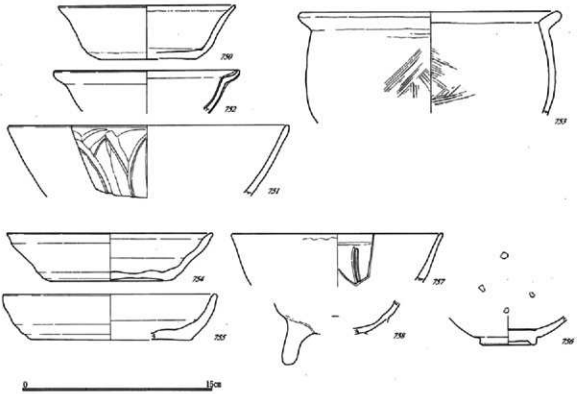


図31　土壙55出土遺物（1/3）

しており、木蓋などで閉塞して放置したことも考えられる。井戸側内下位は埋没し、覆土は明らかに水成の堆積を示す黄褐色粘土である。井戸63の掘形は井戸76掘形を切り込んでいるが、その井戸側を破壊していない。あるいは両者が併存した可能性も考えられる。確認面では遺構73の範囲をこの掘形と考えたが、井戸側の位置が極端に偏ること、調査区壁面がはがれるようにして崩落した位置が井戸掘形壁面の可能性があることから考えると、小径で急角度で立ち上がる形状が復原できることから別の遺構として取り扱う。

井戸側は結桶形で最下段の下半部が残る。復原される径0.6m、井戸側下端は標高0.6mの位置にあ

図32　井戸63・遺構73・井戸76（東から）

る。井戸掘形の径は、上述のように小さなものであるとすれば、径は1.5mほどになろう。

出土遺物（図34、表2）

遺物は掘形埋土中から少量が散漫に出土した。いずれも細片の土器である。土師器皿底面糸切りで外底面の板目が残されない。759は土師器坏である。白磁は玉縁碗（大－碗Ⅳ類）、口禿皿がある。土師器鍋760は口縁部を外方に折り、端部をつまみ上げる。外面は回転を利用した撫で調整、内面には口縁に沿い断続する刷毛目調整を行なう。外面には口縁直下まで煤状の付着物が残る。器表は灰白色。

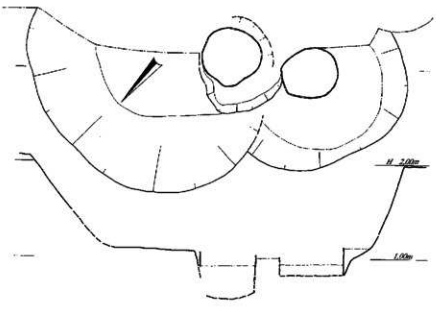


図33　井戸63・遺構73・井戸76（1/3）

図34　井戸63出土遺物（1/3）

土壙73（図32・33）

2区で検出した。楕円形の掘形をもつ遺構である。覆土は黒褐色砂である。先述したように井戸63掘形の可能性を残す。現状で、長さ2.7m、幅1.7m以上、調査面からの深さ1.0mを測る。

出土遺物（図35、表2）　覆土中からコンテナ2/3ほどの分量が出土した。いずれも小破片までの資料である。分量に特に偏在はない。土師器坏皿は糸切底で板目が残される。763は皿、764・765は坏である。白磁は口禿の皿767・766・768とともに碗（大－碗Ⅸ類）が見られる。白磁はほかに極小形の774、皿769（大－皿Ⅵ Ⅰa類）などがある。青磁は龍泉窯系の資料がほとんどである。蓮弁文碗は高台径などの点で複数の類型がある（772・829）。坏は内底面に双魚文を貼り付ける（771・770）。このほか盤がある（773）。

瀬戸卸皿775は底部に箆により条線を刻む。79は土師器とする。外面に叩き目を残す。内面は撫で調整。内外面とも煤状の付着物が残る。

776～778は土師器鍋である。778は口縁部を外方に屈曲させ、端部をはね上げる点が特徴的である。古代の遺物も散見される。780は須恵器高台坏、焼塩壺781は体部の輪細片である。

土壙76（図32・33）

2区で検出した。井戸63と重複して古いが、同時に存在した可能性もある。ただし井戸76は埋め立てられている。井戸側内黒褐色砂質土で埋まり、上部には礫が投入されている。ただ、下部は砂で埋

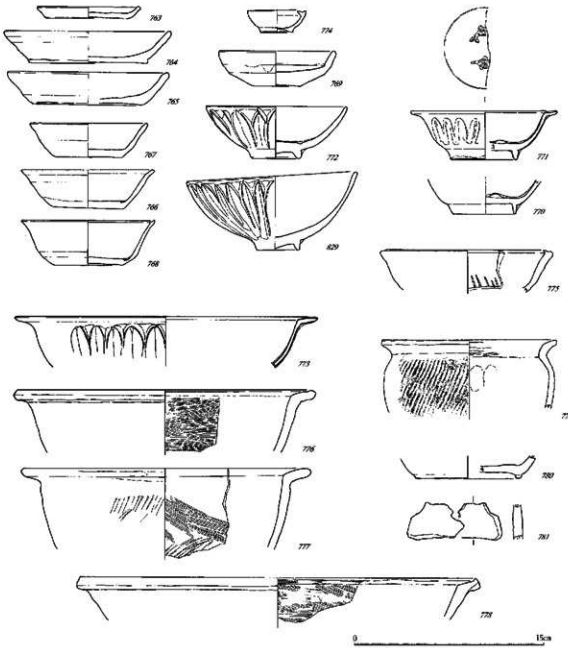


図 35　遺構 73 出土遺物（1/3）

まり、井戸側の一部が圧潰した痕跡があることから、砂層も圧潰に伴う地山砂の流れ込みであり、その結果埋め立てに至ったものとも考えられる。掘形は不整な円形で 2.0m、調査面からの深さ 1.2m を測る。井戸側は結桶形で径は 0.6m、井戸側下端は他の井戸より浅く、標高 0.8m の位置にある。

出土遺物（図 36、表 2）　　覆土中からコンテナ 2/3 ほどの分量が出土した。いずれも小破片までの資料である。構成は多様である。土師器坏皿は糸切底で板目があるものとないものとが混じる。龍泉窯系青磁では、蓮弁文碗に発泡の目立たないものから発泡量が多く、地の見えないものまで変異が大きい。白磁は口禿の皿がある（788）。土器類は多様で、瓦質土器擂鉢・火鉢、東播系須恵器捏鉢のほかに、京都系瓦質土器釜によく似る 790 がある。瓦器椀 792 はいわゆる和泉型か。

789 は陶器鉢である。793 は土師器坏の底部に穿孔途中のものである。両側から作業を進めているが

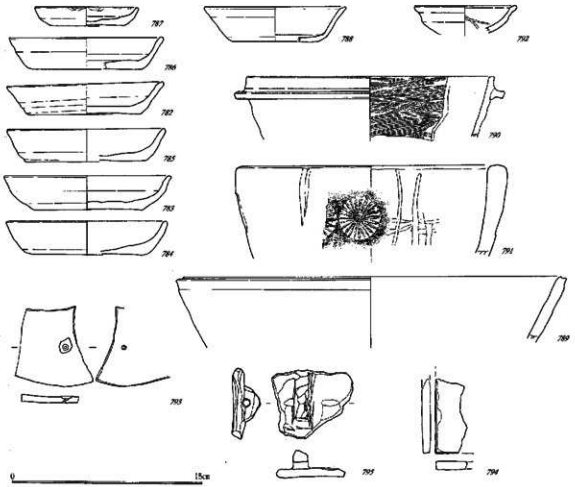


図 36　井戸 76 出土遺物（1/3）

貫通していない。795 は滑石製石鍋把手部を裁量したもの。全体を平滑に磨いている。794 は砥石である。このほかに鉄釘、「景徳元寶」が出土した。

1 面出土遺物（図 37･38、表 2）

調査開始時残された黒褐色砂質土層中出土資料である。

総量はコンテナ 1.5 箱ほどの分量である。半ばが土師器坏皿である。

809～812･814･821･818 は口禿の白磁皿、855 は高台付の白磁皿である。854 は天目釉碗の底部で外底面に墨書が残る。822 は陶器皿。856 はガラス製小壺である。

830･823･828･825･827 は龍泉窯系青磁で、820･823 は坏、外は蓮弁文碗である。

842～844･841･834 は陶器短頸壺である。835･837 は陶器鉢、839 は陶器摺鉢である。

848･852･850･849･851 は鍋で、849 が瓦質土器であるほかは土師器である。

2 層出土遺物（図 38･39、表 2）

現地形を形成した盛土層出土遺物である。総量はコンテナ 6 箱ほどで、そのうち 30%土師器坏、鉢などの土器類が 30%、陶器 20%、小形磁器類が 2%を占める。磁器では青磁がわずかに多い。

813･815･817･816･820･819 は口禿の白磁皿である。831 は青白磁の小形壺で、型づくりした上下を接合して成形する。826 は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。710･836 は陶器鉢、840 は陶器短頸壺である。846 は土師器鍋。832･833 は東播系須恵器捏鉢である。190 は鉄製紡錘。558 は鉄製釣針である。

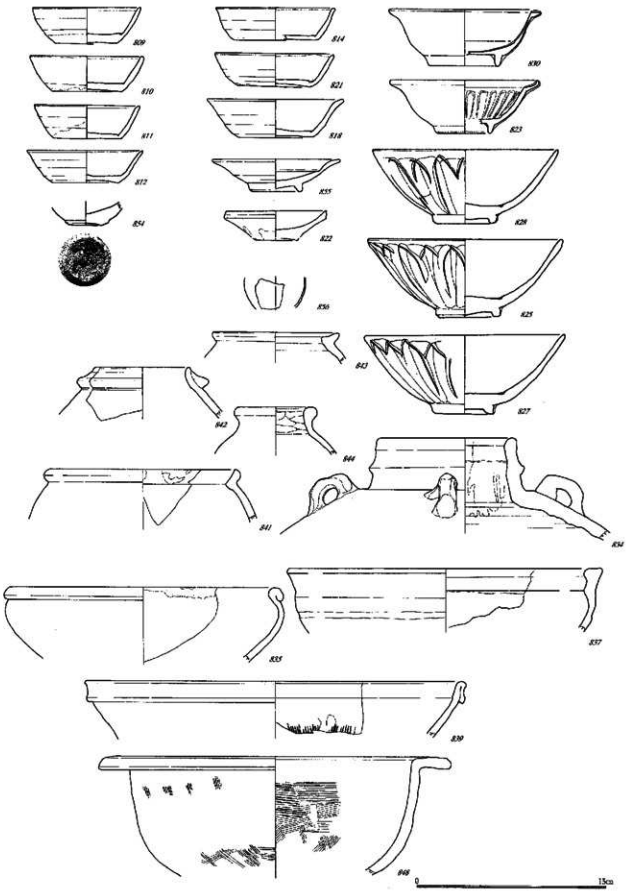


図37　1面出土遺物 (1/3)

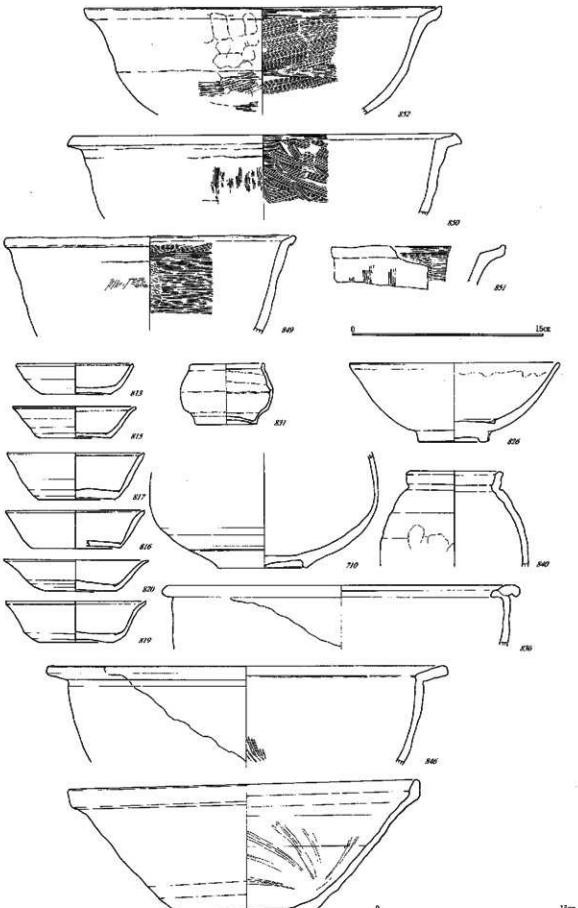


図39　1面・2層出土遺物 (1/3)

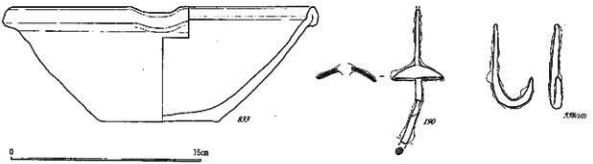


図38　2層出土遺物（1/3・1/2）

Ⅲ　おわりに

博多132次地点（遺跡）は、標高1m程の高さに堆積した粗砂層上に盛土により造成された地盤上に営まれた遺跡である。盛土は、砂地の低地を、砂丘砂を主とした土砂により南西方向から北東方向（現石堂川方向）に向けて埋め立てる様にして進められていったものと思われる。その高さは基盤から1.5mほどでその後、黒褐色の粘質土を主つとした土砂によって均されたものかもしれない。その年代は、遺物の組み合わせからして、13世紀から14世紀にかかる年代を考えられる。その後、今回調査した井戸、土壙などに示されるような生活の場として機能したものと思われる。これにより更に生活面として黒褐色粘質土が生成していったものであろう。しかし、他所にみるように、度重なる造成を加えることなく、現代に至ったようで、結果として南西側隣地との間に大きな段差を生じることとなっている。この段差は微高地Ⅱの北面斜面として南西方向に続くものであり、崖下の半坦地といった景観があったのであろうか。

本地点の遺構出土遺物は盛土層（2層）出土遺物とさほど変わりがなく、ごく近い時間を示している。その後の15、16世紀といった年代を示す資料は少量で、あとは大きく離れて近世も後半期の遺構が遺されている。これと、上記のような地形の改変の状況からするならば、中世の後半期からあるいは近世にかけて生活の場からやや離れた位置にあったことが推測できよう

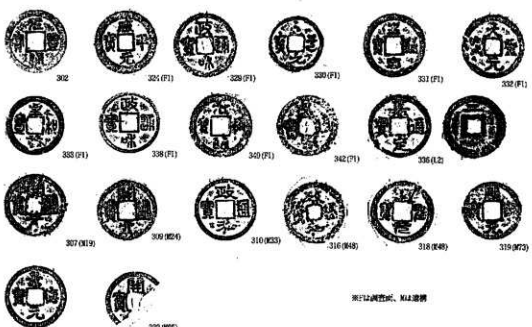


図40　銅銭（2/3）

遺物番号	出土遺構	遺物種別	器種	遺物特記	法量 残存の程度	口径長さ	底径幅	器高厚さ	計測特記	胎土・焼成
801	5	土師器	皿	口縁端部に煤状の付着物(灯明皿、灯心の痕跡か中央が黒い)	復元	67	51	16		胎土：緻密で均質、微細砂を含む、器表：橙色(5YR 6/6)
802	5	白磁	皿	大－皿IX 1d	復元	108	32	28		胎土：緻密で均質、断面：灰白(黄白)色(2.5Y 9.2/0.5) 釉：全面に薄く掛かる、外底面は焼成前に釉を取り、口縁部内外面は施釉後に掻き取り(口禿削り)、施釉部の器表：灰白色(10Y 8/2)
803	5	白磁	碗	肥前系陶器か？	復元	105				胎土：緻密で均質、断面：白色 釉は内外面に厚く均質に掛かる、黄色で、発泡し半透明 施釉部の器表：白色(やや青味)。
804	5	白磁	皿	肥前系磁器か？	復元		68			胎土：緻密で均質、断面：灰黄白色(10YR 8/1) 全面に厚く施釉、釉は発泡し、半透明、施釉部：淡灰色(5GY 8.5/0.3)
805	5	龍泉窯系青磁	碗	小野－青磁蓮弁文碗C群	復元	133				胎土：緻密で均質、細孔あり、断面：酸化炎焼成でにぶい黄橙色(10YR 7/4) 釉は発泡し半透明、器表は細密状光沢、施釉部：明オリーブ灰色(2.5GY 7/1)
806	5	粉青沙器	瓶	粉青沙器						胎土：やや粒状性、細孔あり、断面：褐灰色(10YR 6/1) 釉は厚く掛かる、発泡し半透明、細密状光沢、施釉部：オリーブ灰色(10Y 7/2)
807	5	瓦質土器	擂鉢	体部最大径での径：240	復元		146			胎土：緻密、微砂粒を含む(火山ガラスまたは雲母と見られる粒子が混在)、断面：器表に色調が変化、灰白色(10YR 7/1)～にぶい黄橙色(10YR 6/4) 瓦質、器表は燻し、内面：暗灰黄色(2.5Y 5/2)、外面：黒色。
808	5	青白磁	小形壺	体部径：78	復元	47				胎土：緻密で均質、やや光沢を呈す、断面：灰白色(10YR 9/1) 口縁端内面の一部が露胎、釉調として半透明、施釉部の器表：灰白色(5GY 8.5/0.3)、露胎部器表：にぶい橙色(5YR 6/4)
701	18	土師器 坏			実測	125	80	25		胎土：やや粉状性、器表：浅黄色(2.5Y 8/3)
702	18	土師器 皿			実測	82	61	12		胎土：やや粒状性、細砂粒を小量含む(石英)、雲母細片を含む(金色光沢)
703	18	土師器 皿		平面での歪み大	実測	79	51	14		胎土：精良、細砂を少量含む(石英、長石で花崗岩由来か) 器表：浅黄橙色(10YR 8/3)
704	18	土師器 皿			実測	81	62	13		胎土：精良、細砂粒を少量含む。 器表：浅黄橙色(10YR 8/3)
705	18	土師器 皿		むしろ小形の坏	実測	85	60	16		胎土：精良 器表：にぶい橙色(7.5YR 7/4 やや明るい)
706	18	土師器 皿			実測	82	60	15		胎土：精良、細砂粒を少量含む。 器表：浅黄色(2.5Y 8/3)
707	18	土師器 坏			実測	124	82	24		胎土：精良 器表：にぶい黄橙色(10YR 7/3)
307	19	銭貨	「開元通寶」ほか47枚 2枚銹着							
722	23	土師器 坏		手捏形態(須恵)、口縁部の一部の内面に煤状の付着物	実測	119	96	20		胎土：やや粉状性、少量の砂粒を含む(花崗岩?) 器表：にぶい橙色(5YR 7/4)
309	24	銅銭	「開元通寶」							
310	33	銅銭	「[illegible]通寶」							
708	33	陶器 短頸壺		口縁部、体部、底部破片がある、相互に接合しない、口縁部から体部にかけて被熱によるものか、器表が剥落している。	復元	205	170			胎土：細粒～粗粒砂を大量に含み(長石、石英)、黒色 器表：釉薬がむらにかかる、倒立させて底部からかけたもののようで、釉の流れ方が逆である。(一定しないが、全体として灰オリーブ色(5Y 6/2))
709	33	陶器 広口壺			復元	244	158	153		胎土：精良、細砂を小量含む(長石?) 釉：内面の全部と外面の上半部、釉は不透明で極暗赤褐色(10R 2/2)、露胎部：褐灰色(5YR 5/2)
711	33	陶器 広口壺			実測		85			胎土：やや粒状性あり、細砂を少量含む。 器表：全面に施釉、不透明、ガラス光沢、施釉部：暗赤褐色(5YR 3/6)、露胎部(断面)：にぶい橙色(5YR 7/3)
712	33	陶器 短頸壺		体部最大径：123	復元	70				胎土：精良(にぶい赤褐色(5YR 5/4)) 器表：全面に厚い釉(施釉部：褐色 10YR 3/3、鈍い光沢)
713	33	龍泉窯系青磁	碗	大－碗I 5b(鎬蓮弁文碗)	復元	167	55	68		胎土：精良、細孔あり 器表：釉は高台内面の一部に及ぶ、透明、ガラス光沢を呈し、貫入が顕著 施釉部：オリーブ黄色(5Y 6/3)
714	33	龍泉窯系青磁	碗	大－碗I 5b(鎬蓮弁文碗)	復元	166				胎土：精良、灰白色(2.5GY 8/1)、細密状光沢 器表：やや発泡し、半透明、ガラス光沢を呈す、施釉部：オリーブ灰色(10Y 7/2)
715	33	龍泉窯系青磁	碗		復元	167				胎土：精良、灰色(7.5Y 6/1)、細密状光沢 器表：細かく発泡するが、透明、ガラス光沢を呈す、施釉部灰オリーブ色(7.5Y 5/2)、貫入顕著
716	33	龍泉窯系青磁	坏	大－坏口3類	復元	220				胎土：精良、黒色微粒、灰白色(10YR 7/1)、細密状光沢 器表：発泡し、半透明、施釉部：オリーブ灰色(10Y 6/2 黄色味ほど強し)
717	33	龍泉窯系青磁	碗	大－碗II 3類	復元	166				胎土：精良、灰白色(10YR 7/1)、微光沢 器表：透明、ガラス状光沢、施釉部：オリーブ黄色(5Y 6/3)、貫入顕著
718	33	天目釉陶器	碗		復元	112				胎土：精良、少量の細粒砂を含む、細孔あり、明灰黄色(7.5YR 7/1)、無光沢 体部上半部外面の全面に施釉、釉：不透明、ガラス光沢(ややにぶい)、施釉部：赤黒色(2.5YR 1.7/1)
719	33	土師器 坏			復元	125	85	24		胎土：精良、粉状性あり、少量の細粒砂を含む。 器表：浅黄橙色(7.5YR 8/4)
720	33	土師器 皿			復元	73	56	12		胎土：精良、細砂を極少量含む、にぶい黄橙色(10YR 7/2)
721	33	石鍋			復元	215				石材：滑石
723	39	青磁 碗		中国製ではない？	復元		50			胎土：やや粒状性、灰色(7.5YR 6/1)、無光沢 器表：内面施釉、釉：薄く、ガラス状光沢、施釉部：暗オリーブ色(5Y 4/3)
724	39	瓦質土器 鍋		「京都型瓦質焼成土器」						胎土：緻密、細粒砂を顕著に含む、断面：灰白色(2.5Y 7/1) 器表：むらがある、内面では灰白色(5Y 7/2)、外面は煤状にくすむ
726	41	龍泉窯系青磁 坏？			実測		53			胎土：緻密で均質、断面：灰白色(7.5Y 7/1) 全面施釉し、畳付部は掻き取る、釉は発泡し、半透明、ガラス光沢、施釉部：オリーブ灰色(5GY 6/1)
727	41	石製 球		面取りなどが残っていない、丁寧に研磨したものか、若しくは自然の礫(ポットホール)か。	実測	40				砂岩
728	41	土師器 皿			実測	83	64	10		胎土：やや粉状性 器表：浅黄色(2.5Y 8/3)。
856	41	陶器	坏		復元	188				胎土：精密、緻細を含む、断面：灰黄色(2.5Y 5/1) 釉：口縁部以下の内面に掛かる、薄く、半透明、ガラス光沢を呈す、施釉部の器表：オリーブ黄色(7.5Y 6/3)、外面露胎部の器表：にぶい褐色(7.5YR 5/4)
858	41	白磁	皿	大－白磁皿IX類?(内面草花文) 外面底に墨書「□□」?	復元		35			胎土：緻密で均質、細孔を生じる、断面：灰白色(2.5Y 8/2)ただし断面もかなり汚染？ 釉：内外面に施釉後、外底面を掻き取る、施釉部の器表：明緑灰色(10YR 8/2)
725	42	白磁 水注		北宋代、体部最大径(復原)145	復原					胎土：緻密、均質、断面：灰白色(7.5Y 8/1) 器表：全面施釉、釉：発泡するが透明、貫入顕著、釉の厚い部分では釉が灰オリーブ色(7.5Y 5/2)、施釉部は全体としては灰白色(7.5Y 7/2)
729	44	土師器 皿			復元	83	78	13		胎土：精良 器表：磨されたような変化
730	44	[illegible]			実測			14		胎土：粒状性あり、細粒砂を少量含む(石英) [illegible]
731	45	土師器 皿			実測	82	61	12		胎土：精良、極少量の細粒砂を含む。 器表：浅黄色(2.5YR 7/3)
732	45	土師器 皿			復元	88	67	13		胎土：粉状性顕著、細粒砂を含む(石英) 器表：にぶい橙色(5YR 7/3)
733	45	土師器 坏			復元	128	90	20		胎土：精良 器表：浅黄橙色(10YR 8/3)
734	45	白磁 皿			復元	97	58	26		緻密で均質、断面：灰白色(2.5Y 8/1) 全面に施釉、口縁部口禿削り(2類削り)、畳付部は薄く掻き取る、釉は細かく発泡するが透明、施釉部：明オリーブ灰色(2.5GY 7/1)
735	45	白磁 皿			復元	114	58	43		緻密で均質、断面：灰白色(2.5Y 8/1) 全面に施釉、口縁部口禿削り(2類削り)、畳付部は薄く掻き取る、釉は細かく発泡するが透明、施釉部：淡黄緑灰色(0.5GY 8/1.5 JIS：パーチメント)
736	45	陶器 短頸壺		胴部最大径：90	復元	40				緻密で均質、断面：灰白色(10Y 7/1) 釉：胴部以上の外面と口縁部の内外面に施釉、釉は薄く、透明、ガラス光沢、施釉部：黄褐色(2.5Y 5/4)
316	48	銅銭	「政和通寶」							
315	48	銅銭	「天聖元寶」							
737	48	土師器 皿			復元	92	7.	14		緻密で均質 器表：浅黄橙色(10YR 8/4)
738	48	土師器 皿			復元	80	58	12		緻密で均質 器表：淡黄色(2.5Y 8/3)。
739	48	土師器 坏			復元	126	92	27		やや粉状性、均質 器表：浅黄橙色(10YR 8/3)
740	48	鉄釉陶器 皿			復元	122	42	35		胎土：緻密で均質、細孔顕著、灰白色(2.5Y 7/1) 釉：内面から外面の上部1/3に及ぶ、薄く、ガラス状光沢、不透明、施釉部：黒褐色(5YR 2/2)
741	48	龍泉窯系青磁 碗			復元		40			胎土：緻密で均質、細孔が認める、断面：灰白色(5Y 8/1) 釉：全面に及ぶ、畳付部のみ施釉後掻き取り、釉：わずかに発泡するが透明、ガラス状光沢、貫入顕著。
742	48	龍泉窯系青磁 碗	碗		復元	133	67	38		胎土：緻密で均質、断面：明赤灰色(5R 7.5/2) 釉：全面に及ぶ、高台畳付部のみ施釉後掻き取り、釉：細かく発泡して半透明、ガラス状光沢、氷裂、施釉部：明緑灰色(10GY 7/1.5)
834	48	龍泉窯系青磁	碗	大－龍泉窯系青磁碗I 5b類	復元	160	51	61	器高は推定	胎土：緻密で均質、レンズ状の細孔を生じる、断面：白色？汚損のため不明瞭 施釉：高台外面までの全面、一部は高台内に及ぶ、釉：発泡して不透明、貫入を生じる、ガラス状光沢、施釉部の器表：明青緑色(7.5G 8.5/2.3)
845	48	土師器	鍋		復元	321				胎土：粒状性顕著で細粒砂を多量に含む。 器表：橙色(7.5YR 6/6)
847	48	土師器	鍋	口縁の復元径が異様に大きい、外面には煤が付着する。	復元	318				胎土：粒状性があり、粗粒砂を含む、レンズ状の空隙が生じる。 器表：内面でにぶい黄橙色(10YR 7/4)
743	50	青磁 碗		中国製ではない？	復元		54			胎土：やや粉状性、均質、断面：灰白色(10YR 7/1)、光沢無し 釉：一部が高台外面に及ぶ、体部でもむらあり、発泡して不透明、細密状?光沢、施釉部：オリーブ黄色(7.5 6/3)
744	50	青磁 碗		中国製ではない？	復元		52			胎土：緻密だが細粒砂を顕著に含む(白色不透明：長石?)、光沢無し、断面：灰色(5Y 6/1) 釉：細かく発泡し、半透明、ガラス状光沢、むらに掛かる、一部が高台内面に及ぶ(畳付部は削りとる)、施釉部：灰オリーブ色(5Y 6/2)
745	50	龍泉窯系青磁 坏		大－坏III 3類	復元	138				胎土：緻密で均質、断面：灰白色(5Y 9/0.5) 全面に厚く施釉、釉は発泡し半透明、貫入を生じ、ガラス状光沢、施釉部：明緑灰色(10GY 7/1)。
746	50	瓦		瓦としては厚く、曲面がはっきりしない。				36		胎土：緻密、礫が混じる、還元で焼成 断面：灰色(5Y 6/1)
747	50	土師器？		弥生土器甕？						胎土：粉状性顕著、細砂粒を多量に含む。 器表：灰黄色(2.5Y 7/3)
748	50	土師器 鍋		細片から復元しているので、計測値は不確実。外面がややくすんだようになっている。	復元	323				胎土：粒状性、細砂を顕著に含む。 器表：にぶい橙色(5YR 6/3)
749	53	瓦器 碗		「大和型」瓦器碗か	復元	136				胎土：緻密で均質、断面：灰白色(10YR 8/1) 瓦器、器表は内外面とも黒色。
750	55	白磁 皿		口禿、大－皿IX 1c類	復元	108	58	33		胎土：緻密で均質、断面：灰黄白色(10YR 9/1) 全面に施釉、高台畳付から底部近くの体部までを掻き取り、口縁端と内面端を施釉後に口禿削りより、釉は発泡し半透明、にぶいガラス状光沢、施釉部：灰白色(10Y 8/1)

表1 報告遺物一覧1

病変	遺存量（分数）	資料番号
外表面：赤切り＋研出　内表面：十字鑿痕で仕上げ（平面）		861
体部外面1/3は斜線状刷り。	大破片（胴部の全部と体部の一）	862
胴縦折り上げ。	体部の破片	863
体部内面に指が押圧し出し	底部の破片	864
外面に「ラッパ状押」	口縁部の破片	865
内外面に自主調整による調整，内面に文様（櫛押し）		866
外表面：外面・体部に縦ヘラ磨き　口縁部の内外面は丁寧に調整。	上半部の小破片（1/4）	867
体部は胴の張縦で分割（4～5区画）。各区に指押しの指文を施文（指圧の痕跡）	体部（1/4），口縁部のごく一部（胴部は欠か？）	868
外表面：赤切り　内表面：横方向の刷毛（単）		869
外表面：赤切りとかすかな研出　内表面：横ヘラ磨き（横ハケ調整）で	口縁の一部を欠く	870
外表面：赤切り　内表面：上半に横位ヘラ磨き，下に縦ヘラ磨き		871
外表面：赤切り　内表面：胴部表面で仕上げ		872
		873
外表面：赤切り＋板目（板状研磨）　内表面：板状研ぎ（不明瞭）	口縁を部分的に欠く	874
外表面：赤切り＋研出　内表面：中央部分を大きく研ぎ仕上げ	胴下部分のみ残存する	875
		876
		877
外表面：赤切り＋板目　内表面：中央部表面で仕上げ（縦横ハケ）	完存（口縁の一部一部を欠く）	878
		879
		880
底部を丸に成形したものか，胴部を除が残り，形状も不連続，体部内面に明瞭な段差，底部直下の内面に口部の方向の痕跡		881
内外面とも明瞭胴内面は特に強い，内表面に口縁部（口縁部，肩位）	体部の殆どと，口縁部1/4	882
「内外面胴部指押で調整」　外表面：赤焼成　内表面：灰色（住居跡で生上げ	底部近くの全部	883
全体に指圧痕で調整，外表面（意次第）は丁寧調整に近い表面。		884
	上半部の1/2を欠く	885
	快半部1/2の破片	886
外張りとさら輪積痕	上半部の小破片	887
口縁部は胴張りより上げ？	上半部の破片	888
外面：ヨコ等方に走る横撫ヘラ	上半部，1/4の破片	889
体部下半部外面に強張り	上半部，1/4の破片	890
口縁部は胴部の仕上げ面で内側に出げ，胴押しして後る　外表面：赤切り後，内表面：中央部横撫で仕上げ？	1/4以下の小破片	891
外表面：赤切り後，　内表面：横撫ヘラ仕上げ	1/4の小破片	892
輪による強ナデし，研磨	口縁部の破片	893
外表面：胴部等まで研ぎ　内表面：輪状の研磨（輪止？）	胴部（1/4）の破片	894
外表：指で調整，体部にかけて指圧調整，内面：口縁部近を指で調整する以外は板方向の横ヘラ調整		895
		896
	完存	897
外表面：赤切り＋研出　内表面：中央部撫で仕上げ	小破片（1/3）	898
切り成形の後，口縁に沿う指で調整を行う？	上半部の破片	899
	胴部の小破片（1/3）	900
全体を胴張り手後，回転指で中（体部内面に引き上げ痕が残り，底部が厚（指紋が大きい）。	底部・胴部を欠く（大破片（3/4 残存）	901
外表面：赤切り＋板目？　内表面：胴横撫で仕上げ	小破片（1/3）	902
胴部：粗い指圧，内面：粗い指圧調整	胴部の小破片	903
外表面：赤切り　内表面：横撫ヘラ	大破片（2/4）	904
外表面：赤切り　内表面：撫ヘラ，たるのか，荒れた感じ。	小破片（1/4）	905
外表面：赤切り＋研磨　内表面：中央部撫で仕上げ	口縁部の3/4を欠く	906
	小破片（1/3）	907
	小破片（1/3）	908
	胴部以上の小破片（1/4）	909
		910
外表面：赤切り＋板目　内表面：横撫で仕上げ	小破片（1/4）	911
外表面：赤切り　内表面：横撫で仕上げ	小破片（1/3）	912
	小破片（1/3）	913
体部下半部に回転ヘラ削り。	小破片（全形を復元できる1/4）	914
外面に輪積痕ナデか，胴部底片のため詳細不明。	胴部の小破片	915
内面：指押し痕ナデ？	小破片（全形を復元できる1/4）	916
外面に輪積痕ナデ（不明？）　外表面：粗合研ぎの痕跡　部を指ヨ取る。	大破片（口縁部の大部分を欠く）	917
内外面の下部2/3に横位研磨	大破片（1/3）	918
内面は指で調整痕，下半部に指圧痕跡。　外面は体部に強い指圧痕跡。		919
体部下半に回転調整？	下半部の小破片（1/3）	920
外面胴部下部に，斜かな形状で調整りが行われているかもしれない（強のため見えず）。横撫面に指紋が残る。　外表面：黒	底部の小破片（1/3）	921
底部は削り上げる？	上半部の小破片（1/3）	922
	胴部の破片	923
外面強かな明ヨ目（全体として山形），内面：平に撫で調整	底部の破片	924
内外ヘ外面口縁部等は横撫で調整，体部の外面は指ヨ上げ又は撫で調整。		925
外面口縁部近くに撫で，内面は調整。	口縁部の破片	926
外表面：輪状ヨ取り部は決れも？，明黄褐色か（注6/8）	小破片（1/4）	927

遺物番号	挿図番号	遺物種別	器種	遺物特記	法量 数値の精度	口径長さ	底径幅	器高厚さ	計測特記	胎土・焼成
751	55	青磁 碗		高麗青磁？	復元	170				胎土：粒状性あり，均質，断面：褐灰色(10YR 5/1)　釉：薄く掛かる，発色し，半透明，細密状光沢，釉部：オリーブ灰色(10Y 5/2)
752	55	龍泉窯系青磁 坏		大－坏Ⅲ3類	復元	114				胎土：緻密で均質，細孔あり，断面：灰白色(7.5Y 8/1)　全面に厚く施釉，釉は発色し半透明，貫入を生じ，にぶいガラス状光沢（口縁部内面はすりガラス状），釉部：明緑灰色(10GY 7/1.5)
753	55	土師器 鍋		外面付近に口縁部は被熱による劣化が強い。	復元	200				胎土：粒状性顕著，赤褐砂を少量含む。　器表：鈍い橙色(7.5YR 7/3)
813	56	白磁	皿	大－白磁皿Ⅸ1b類（口禿）	復元	91	35	25		胎土：緻密で均質，細孔あり，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　底部と付近の外面以外に施釉，口縁部は内外面の釉部を焼成前に削り取る，釉部の釉表：黄緑灰色(0.5Y 8/1.5 釉の厚い部位では青緑)，釉剥ぎの部分はにぶい褐色(7.5YR 5/4)
846	57	土師器	鍋		復元	315				胎土：緻密，細砂を含む，断面：にぶい橙色(7.5YR 7/3)　器表：煤付によるものか，外面は口縁部まで煤が付着，内面も変色している。
816	58	白磁	皿	大－白磁皿Ⅸ1c類（口禿）	復元	106	69	30		胎土：やや粒状性，均質，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　釉：全面に施釉し，焼成前に外底面を掻き取り口縁部の内外面を削り取る，釉は発色して半透明，釉部の釉表：灰白色(2.5GY 8/1)
831	58	青白磁	小形壺		復元	59	44	48	把手 高さ：73	胎土：緻密で均質だが，細い[illegible]，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　施釉：口縁部を除く内面，口縁部から底部近くの外面に掛かる，口縁の釉を施釉後削り取る，釉：透明でガラス光沢，釉部の釉表：釉の薄い部位では灰白色(5GY 8.5/0.3 釉が厚い部位では青緑灰色(5GY 6/1)
754	62	土師器 坏		完大	復元	125	60	30		胎土：粒状性顕著で，細礫までを含む。　器表：浅黄橙色(10YR 8/4)
755	62	土師器 坏			復元	130	70	28		胎土：緻密，細砂少量，細孔が目立つ。　器表：浅黄橙色(10YR 8/3)
756	62	青磁 碗			復元		65			胎土：緻密で均質，断面：灰色(7.5Y 6/1)　釉：高台外面に及ぶ，厚く，透明で細密状光沢，釉部：灰オリーブ色(7.5Y 6/2)
757	62	青磁 碗			復元	160				胎土：緻密で均質，細孔なし，断面：褐灰色(10YR 6/1)　釉：内外面に厚く掛かる，口縁部の外面に達する，表面はやや風化するものか，鈍い光沢，釉部：灰オリーブ(5Y 6/2)
758	62	白磁 香炉？		胃口径？，脚付						胎土：緻密で均質，断面：浅黄灰色(2.5Y 8.5/1.5)　釉：施釉し，半透明，釉部：明緑灰色(7.5GY 8/1 やや青み？)
759	63	土師器 皿			復元	80	64	12		胎土：やや粒状性，均質，極少量の微粒砂（石英は含まれるか？）　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/2)
760	63	土師器 鍋		細片であり，計測値は不確実。	復元	286				胎土：粒状性顕著，細粒砂を含む。　器表：灰白色(10YR 8/2，外面の口縁下まで煤状の付着物，一部では厚く付着
761	64	土師器 皿			復元	75	56	12		胎土：緻密，細粒砂を少量含む。　器表：橙色(7.5YR 6/6)，焼成で，やや灰色気味
762	64	土師器 鍋			復元	279				胎土：粒状性顕著，細粒砂（石英などのほかに，褐色粒子）を含む。　器表：鈍い橙色(7.5YR 6/4)
319	73	銅銭	「開寧元寶」							
763	73	土師器 皿			復元	82	67	9		胎土：緻密，細粒砂を少量含む。　器表：にぶい橙色(7.5YR 7/4)
764	73	土師器 坏			復元	130	96	25		胎土：やや粒状性，細粒砂を含む（長石，雲母ほか）。　器表：にぶい橙色(7.5YR 7/3)
765	73	土師器 坏			復元	127	88	26		胎土：緻密で均質　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/4)
766	73	白磁 皿		口禿，大－皿Ⅸ1c類	実測	107	59	30		胎土：緻密で均質，断面：灰白色(10YR 8/1)　釉は外底部と高台に近い外面以外の全面に薄く掛かる，発色して半透明，口縁部釉を削り取る，内面を削りとる，釉部：灰白色(7.5Y 8/2)
767	73	白磁 皿		口禿，大－皿Ⅸ1c類	復元	93	53	27		胎土：緻密で均質，細孔あり，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　全面に施釉，畳付部は掻き取り，口縁部の内外面を回転ヘラ削り，釉：発色し半透明，細密状光沢，釉部：灰白色(2.5Y 8/1)
768	73	白磁 皿		口禿，大－皿Ⅸ1c類	復元	106	55	35		胎土：緻密で均質，細孔あり，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　全面に施釉，畳付部は掻き取り，口縁部の内外面を回転ヘラ削り，釉：発色し半透明，細密状光沢，釉部：灰白色(2.5Y 8/1)
769	73	白磁 皿		大－皿Ⅶ1a類？ 体部が厚い	復元	92	37	27		胎土：緻密で均質，細孔あり，明灰黄色(10YR 8/2)　釉は全面に薄く掛かる，発色して半透明，貫入が著しい（大量），畳付部は焼成前に掻き取り（回転），釉部：明緑灰色(10GY 7/1.5，やや鮮やか)
770	73	龍泉窯系青磁 坏		大－坏Ⅲ4b類	復元		51			胎土：緻密で均質，細孔あり，断面：灰白色(7.5Y 8/1)
771	73	龍泉窯系青磁 坏		大－坏Ⅲ4b類	復元	117	52	39		胎土：緻密で均質，細密状光沢，断面：灰白色(2.5Y 8/1)　高台畳付付近を除く全面に厚く施釉，釉は発色して半透明，釉部：灰オリーブ色(5Y 5/3)
772	73	龍泉窯系青磁 碗		小形	復元	110	40	41		胎土：緻密で均質，断面：明灰色(N7)　内面から高台外面まで厚く施釉，釉は発色するが，透明，貫入顕著（粗い），釉部：灰黄緑色(5GY 5/3)
773	73	龍泉窯系青磁 盤			復元	238				胎土：緻密で均質，断面：灰白色　内外面に厚く施釉，釉は発色し半透明，ガラス光沢，釉部：灰緑色
774	73	白磁 合子（身）		時代が下る可能性？ 口径は受部径	復元	47	26	17		胎土：緻密で均質，断面：白色　体部の内外面に薄く施釉，外面畳付から1/3までと，受部は露胎，釉は灰色透明，ガラス光沢
775	73	瀬戸美濃陶器	瓶類	古瀬戸後期Ⅳ期か？	復元	133				胎土：緻密で均質，断面：褐灰色(10YR 6/1)　内外面に薄く斑らに掛かる，不透明で，釉部：灰白色(5Y 7/1)
776	73	土師器	鍋	体部外面に煤状の付着物。	復元	230				胎土：粒状性あり，細粒砂を含む。　器表：灰白色(10YR 8/2)
777	73	土師器	鍋	外面に煤状付着物，内面の下部もくすんだようになっている。	復元	228				胎土：緻密，細粒砂，褐色粒を含む。　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/3 付着物によるものか)
778	73	土師器	鍋	外面に薄く煤状付着物。	復元	315				胎土：緻密で細粒砂を多量に含む（石英，長石）。
779	73	土師器	皿	被熱か，特異の一部還元。	復元	137				胎土：細礫までを含む。　内外面とも煤状の付着物，あるいは変色。
780	73	須恵器	坏（高台付）		復元		83			胎土：緻密で均質，断面：赤灰色(2.5YR 5/1)　焼成：堅緻，器表：赤灰色(2.5YR 5/1)
781	73	瓦質土器								胎土：粒状性があり，細粒砂を含む，断面：灰色(5Y 6/1)　器表：にぶい橙色(7.5YR 7/4)，被熱によるものか。
829	73	龍泉窯系青磁	碗	大－龍泉窯系青磁碗Ⅲ2類	復元	134	34	58		胎土：緻密で均質，黒色の細粒を含む，断面：灰白色(7.5Y 8/1)　施釉：全面に施釉後，高台畳付と付近の高台内外面の釉を削りとる，釉：発色して半透明，ガラス状光沢，釉部の釉表：明緑灰色(10GY 7/1.5)
320	74	銅銭								
782	76	土師器	坏		実測	124	85	24		胎土：緻密，細粒砂を少量含む。　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/3)
783	76	土師器	坏		復元	131	88	27		胎土：緻密，砂粒を含む。　器表：浅黄色(2.5Y 7/3)
784	76	土師器	坏		復元	131	91	27		胎土：不均な状態，細粒砂をごく少量含む。　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/3)
785	76	土師器	坏	全体に焼けたような状態	復元	124	95	24		胎土：やや粒状性，細粒砂粒色(7.5YR 6/6，ほかの部分の色調に同じ)を少量含む。　器表：にぶい褐色(7.5YR 6/3)
786	76	土師器	坏		復元	121	90	25		胎土：緻密，細粒砂多含む。　器表：橙色(7.5YR 6/5)
787	76	土師器	皿	器物の劣化が著しい，灯明皿として利用か（被熱箇所の口縁端部のわずかな欠け部分を中心に煤状の付着物が残る）。	復元	81	59	16		胎土：緻密，細粒砂を微少量含む。　器表：浅黄色(2.5YR 7/3)
788	76	白磁 皿		口禿，大－皿Ⅸ1c類	復元	111	68	28		胎土：緻密で均質，黒色鉱物粒混，断面：赤黄白色(10YR 9/1)　全面に施釉，畳付部は掻き取り，口縁部の内外面を回転ヘラ削り，釉：発色し半透明，ガラス状光沢，釉部：灰白色(2.5GY 8/1)
789	76	陶器	鉢	擂鉢または捏鉢か。	復元	305				胎土：やや粒状性，細粒砂を含む（石英が主），断面：にぶい橙色(5YR 6/3)　器表：[illegible]，灰褐色(7.5YR 6/2)
790	76	瓦質土器	鍋	肩下部以下の体部には煤状の付着物が厚い。	復元	196			把手の幅2.2	胎土：緻密で極少量の細粒砂を含む，断面：灰黄色(2.5Y 6/2)　器表：付着物のない部位では褐灰色(10YR 4/1)
791	76	瓦質土器	火鉢	体部は輪花状の整形が行われているので，口径の復元値は参考程度，もっと径が大か，いわゆる「菱形火鉢」	復元	211				胎土：やや粒状性，均質，断面：灰白色(5Y 8/1)
792	76	瓦器	碗？	いわゆる「和泉型」か，体部の破片から径を復元したが，やや小径にすぎる。	復元	87				胎土：緻密で均質，断面：灰黄色(2.5Y 7/2)　器表：燻しにより暗灰色(2.5PB 5/1)
793	76	土師器	坏							胎土：やや粒状性があり，均質。　器表：にぶい黄橙色(10YR 7/4)
794	76	砥石		板状，硯かもしれない	現況	63	25	6		粘板岩？　灰色(5Y 6/1)
795	76	石鍋片		滑石製石鍋を転用，鍔み部を中心とした破片の周辺を磨いて滑らかにする，鍔みを削り込んで小さくしている。	現況	65	54	22		滑石
796	79	土師器	坏		復元	82	62	12		胎土：やや粒状性，均質。　器表：浅黄色(2.5Y 7/3)
322	95	銅銭	「[illegible]」							
331	1区	銅銭	「皇宋通寶」							
332	1区	銅銭	「天聖元寶」							
338	1区	銅銭	「政和通寶」							
339	1区	銅銭	「元(祐)通寶」							
343	1区	銅銭	「皇宋通寶」							
819	1区	白磁	皿	大－白磁皿Ⅸ1d類（口禿）	実測	100	58	32		胎土：緻密で均質，断面：白色(2.5 9/1)　釉：全面に施釉し，焼成前に外底面を掻き取り，口縁部の内面，外面釉面を削り取る，釉は発色して半透明，釉部の釉表：灰白色(5GY 8.5/0.3)
821	1区	白磁	皿	大－白磁皿Ⅸ1b類（口禿）？ 釉，口縁部の処理がほか資料と異なる。	実測	93	62	26		胎土：緻密で均質，露胎部の器表：灰白色(2.5Y 7/1)　釉：外底部と口縁部を除いて(?)施釉（回し掛け?)か，口縁部の外面は施釉後に削りとるが，内面の釉の縁は波状を呈している，釉は透明でガラス状光沢を呈す，施釉部の器表：灰白色(5Y 7/2)

表2　報告遺物一覧2

部位	部分名称（詳細）	規格番号
	口部盛の調示	731
口部周囲は鼻孔を引き上げ？	上唇の結び	732
内面：口唇部の外面は鼻孔間で凹陥、体部外面は野手人差で調整、体部には部分的に刻む鼻孔がのこる。	上半身の結び	733
体部外面の下半部は鼻孔。	大結び（1/2）	833
内外ぎを指で成型、内面下部には低い突起を設ける。	上半身の結び	846
	小結び（1/2）	816
胴部の上下部を指で成型する	人結び（武部と上下部の一部（1/3）	831
外部面：赤塗り　内部面：黒褐部塗で仕上げ	才結び（1/2）	751
外部面と赤塗り　内部面は黒褐部塗で仕上げ	小結び（1/4）	752
外部面：器材に鼻孔（最下部の部分か？）　内部面：付着4点が（部上月）	結部結び	754
内部面：口部近くの胴に、胴部（内部部）、結に鼻孔 等の身様。	口縁等結び	757
	胴部結び	758
外部面：赤塗り　内部面：黒褐部塗で仕上げ	蝶ヒ（1/6）	759
外部：胴部で中、体部の胴部とより等身胴部、外面は上部に沿う方向の横結線で調整。	口縁等の結び	760
外部面：赤塗り　内部面：黒褐部塗で仕上げ	人結び（1/2）	761
外部：口縁部近まで押さえ指で調整、底上部が特徴。内面：口縁部上部まで指で調整。	口縁等の結び	762
		819
外部面：赤塗り＋結び　内部面：黒褐部で仕上げ（口縁部）	大結び（1/2）	763
胴部で重の部部不明瞭（横線？）、内部面：赤塗り　内部面：「ロ」のリボンの結び計算で	大結び（1/2）	764
外部面：赤塗り＋結び　内部面：黒褐部塗で仕上げ	小結び（1/2）	765
外面胴：胴部強調り、体部上端1/3まで及ぶ。		766
体部外面部分から1/3の部まで部部調整り。	小結び（部部の全体と体部上端）	767
体部外面部分から1/3のまで部部調整り、内面胴：中央の隆起が残り結る	小結び（武部の全体と体部口縁部をその体部のごく一部）	768
外面部：体部外面は口縁部近くまで部部調整り、内面部：底面丸（粘り付け）	結部の全部と口縁等・体部のごく一部。	769
	底部結び（5/6）	770
外面：鼻等を刻む、内部面：草結文（粘り付け）	小結び（1/2）	771
外面：蓋方文（部分部り）　内部面：部結	小結び（1/2）	772
外面に蓋方文（所部り）	小結び（1/4部）（1/4）	773
部部しとる成部、内部に部結線で。	大結び（2/3）	774
内外問とも部結線で調整。底部近くの部部部分に鼻孔で。 底部不明。	体部の結び	775
外部面：赤塗りと結び　内部面は黒褐部塗で仕上げ　外面：口縁部は指先で、体部は押さえ上部で調整。	結部の結び	776
内外問とも補足用部分、外部はその横線で調整。	上半身の結び	777
外面：部分又は内部の内部部部部で成了（押さえ指で）、部部の内外を結す。内面：口縁部近に沿える方向の横線部調整。	口縁等付近の体部結び	778
内面：部分部部（口縁部で口縁部に沿う方向の横線部調整、又は部分部には指押さえ）。外面：口縁部から部分部（部上部分の部分）押さ部分	上半身の結び	779
	底部の結び	780
		781
外部に結蓋方文（所部り）、単位が強い。	人結び（1/2）	809
		810
外部面：赤塗り　内部面：黒褐部塗で仕上げ	元部、はげ？	782
外部面：赤塗りと結び　内部面：黒褐部塗で仕上げ	大結び（口縁部の大部分を欠く）	783
外部面：赤塗り　内部面：中央部黒褐部で仕上げ	大結び（1/2）	784
外部面：赤塗り　内部面：部分部で	人結び（1/2）	785
外部は口縁部で部部の部部に沿う。 外部面：赤塗り　内部面：中央部横方向の線で＋横線部で	小結び（1/4）	786
外周は部部で調整の単位が明確に残る。 外部面：赤塗り＋結び　内部面：中央部横方向の線で（結び）	大結び（1/2）	787
体部外面部部から1/3の部まで部部部調整。	小結び（1/4）	788
内面：結合周の調で、外部：部方向の線で部で（部部、部上の部部、押出は軽い）。口縁周辺は押部工具で部調。 外部は上部部のみとも部部で。	口縁等結び	789
内周：口縁に沿う方向の横線である部部部調整。外部：口縁上周から斜方部部で口縁に沿方向の横線で調整。 部分部部は部押さえ部分と部部で調整。 押部は明瞭。		790
内面部：輪足の、部部：全面部の部部さが残れる。全体として部方向、さらに部の横方向に部分的で格子状を呈す。 内面周辺は部分的で部部（8.5 5）　輪部結合と部　部結として押す。		791
内周から外周の上半部まで口縁に沿う面で調整、外部下半は指押さえ？ 内周には部文様の跡消き。	結び	792
外部面の中央部に内周部から部分する。 部部部に沿いている。 部部下部に行っているとから、もとをとは部として完形のものに近くて、ったったと部部である。		793
		794
		795
外部面：赤塗り　内部面：黒褐部塗で仕上げ	小結び（1/2）	796
		818
		811
		812
		813
		820
部部から1/3の体部外面に部部り。	人結び（2/3）	819
部部から1/3の体部外面に部部り。	小結び、はげ部分	821

抄録

書名	はかた 博多
副書名	博多遺跡群第132次調査報告書
巻次	96
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	805
編著者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
作成法人ID	
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1丁目8番1号
遺跡名	はかたいせきぐん 博多遺跡群　第2次
	ふくおかしはかたくかみごふくまち480・481・482
遺跡所在地	福岡市博多区上呉服町480・481・482
市町村コード	40132
遺跡番号	121
北緯	333544　（日本測地系）
東経	1302452　（　〃　）
調査期間	20010723～20010910
調査面積	84
調査原因	住居兼用事務所建築
種別	集落
主な時代	鎌倉時代
遺跡概要	集落－鎌倉時代－井戸4＋土壙21＋小穴多数－糸切底土師器＋青磁＋白磁＋輸入陶器＋在地系土器＋搬入土器
特記事項	
備考	

博多96
—博多遺跡群132次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第805集
2004年3月31日
編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区長浜2丁目1-30

博多96
—博多遺跡群132次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第805集
2004
福岡市教育委員会